

第三百七十一回 青葉会

平成二十九年二月二十三日(木)

午後六時〜八時半 文京区民センター

〈顧問〉

☆ 川合万里子 先生

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 川口孤舟 久米五郎太 小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯

〈投句〉

伊賀山そらお 柿崎忠彦 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 星田啓子
宮内規雄 山崎亜也 渡邊盛雄
赤田堅 安部眞希子 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 福島正明
村田くに子 山本三恵

〈紙上選句〉

《互選句》

七点

☆ 道問へば優しく指さす春津軽 忠彦 (堅・眞・紀・万・龍・く・天)

☆◎ こけし挽く香や天窓の雪明かり 一灯 (眞・万・孤・敏・ゆ・天・三)

六点

☆ 失せし鍵出でし安堵や春兆す 恵洲 (堅・紀・万・敏・く・三)

五点

☆ 風やめば淡き二月の昼の月 全 (万・五・弘・龍・け)

(☆↓「風止むや二月の昼の月淡し」)
☆ 青天を抜き白梅の咲きそむる 堂哉 (堅・猛・孤・千・灯)

☆ 雪解滝響く光の束となり 一灯 (猛・万・敏・ゆ・允)

☆ 待ち合せ芝居に急ぐ春シヨール けいこ (紀・万・孤・千・三)

☆ 怪我治し声に力や春一番 紀久男 (五・ゆ・灯・正)

☆ 春泥を深く刻みし轍かな 孤舟 (灯・允・け・天)

☆ 如月や道行く先の森暗く 五郎太 (紀・弘・敏・三)

(文楽「曾根崎心中」)

市に老い角巻ほつる漁師妻

☆ 市に老い角巻ほつる漁師妻 一灯 (眞・く・天・三)

☆ 壮大な記紀のドラマや建国日 昇 (堅・猛・万・允)

☆◎ 靴下に妻よりバレンタインチョコ 全 (万・孤・灯・正)

◎ 畦焼きの炎神代へ誘へり 規雄 (堅・孤・千・ゆ)

(☆：下五↓「誘はれ」)
☆ 寒紅梅冷気と香り漂よひぬ 猛 (万・千・く)

三点

(☆↓「漂はず冷気と香り寒紅梅」)
☆ 蒼天と明日を映す石鹼玉(しゃぼんだま) 孤舟 (五・天・三)

☆◎ 山門を吹き抜けて来る梅の風 弘子 (万・孤・允)

☆◎ 一睡の覚めて微笑の風信子 全 (万・孤・五)

(☆：園芸品種が多く花に芳香のあるヒヤシンスに微笑まれない)
☆ 春浅き二人暮しのカレーの香 ゆたか (万・允・正)

☆ 富士の嶺茜色せし春立ちぬ 全 (堅・猛・五)

☆ 春立つや干支の風見を軋ませて 一灯 (万・敏・け)

☆ 車座に肩ふれ合つて余寒かな けいこ (眞・万・く)

☆ 春嵐一人も良きと思ふ朝 全 (紀・弘・龍)

☆ 被災地の寒造り買ふ福島館 紀久男 (万・正)

二点

☆ 句座に酒師の卒寿祝(ほ)ぐ四温かな 全 (万・龍)

(上五↓「詩友どち」又は「詩の仲間」にすれば韻を踏んでいいと思ふが如何?)

春二番過ぎて本番待ち焦がる 猛 (眞・紀)

冬霞ポツポツと瀬戸の島 全 (ゆ・け)

碧天に伊吹山見ゆ雪姿 全 (弘・灯)

一点

- ◎ 春雪や可憐な魔女の天翔る
健介 (孤・ゆ)
- ☆ 春一番帽子並木の枝にあり
ゆたか (万・千)
- ☆ (☆↓「春一番並木の枝に帽子乗り」)
- ☆ 合掌の山家五軒や雪月夜
一灯 (万・允)
- ☆ (☆…上五↓「合掌造りの」)
- ☆ リコーダー吹きて薄氷(うすらひ) 割りにけり
啓子 (万・弘)
- ◎ ほん柑の赤き夕陽の色に似て
全 (孤・敏)
- ☆ 梅の里行くは支線に乗換へて
亜也 (紀・万)
- ☆ 床屋出て額にふるる春の雪
天牛 (龍・灯)
- ☆ 常温の諸泊(もろはく) なじむ花菜漬
盛雄 (紀・万)
- (☆…苔の菜の花の浅漬け色が美しく、上質な日本酒諸白にふさわしい)
- 老いの坂一步二歩三步と内裏雛
全 (紀・天)
- 富士の雪ピンクに染めて日の昇る
そらお (千)
- 春めくや仇な芸者の菊之助
紀久男 (正)
- (「梅ごよみ」の深川芸者の仇吉)
- つくばひに五色散椿(さんちん) 法然院
全 (猛)
- つばめ来る門の日赤社友章
孤舟 (弘)
- 亀鳴くや若しや空耳かも知れず
全 (天)
- まんさくの花はや開く越の国
五郎太 (け)
- ☆ 姉弟歌ふ登園春が来た
弘子 (万)
- うんうんと聞いてくれている犬ふぐり
全 (眞)
- 春嵐狭き地球を仕切るとは
健介 (猛)
- 寒明けや早やも浮かれし猫二匹
堂哉 (け)
- (◎…浮かれ猫は恋猫と見なされる為季重なり)
- ◎ 春の星男黙して椅子を立つ
ゆたか (孤)
- 春嵐狂ひし時計に世も狂ひ
全 (猛)
- ☆ よく見れば冬芽ほどける準備する
啓子 (万)
- (☆↓「冬の芽の解く準備を見詰めをり」)
- ☆ 毛嵐や南の海にも寒気来る
全 (紀)
- 真青なる空に浮かびし睦月富士
規雄 (万)
- (☆…「浮かびし」の「し」という完了形にするのは不必要)
- ↓「真青(まっさお) な空に浮かべる睦月富士」)
- ☆ 春寒し糺(ただす) の森の鞍馬石
けいこ (く)
- いつしかに忌み嫌はるも杉の花
亜也 (天)
- 掛(かか)り付けの医師の咲かせし沈丁花
天牛 (万)
- ☆ 春めくやペルー土産の指人形
全 (五)
- 春一番壊れしガラ携買ひ換へに
全 (紀)
- ☆ 春愁や魍魅魍魎の六本木
盛雄 (正)

● 次回青葉会

三月二十三日(木) 午後五時半〜八時半

文京区民センター

△当季雑詠各自五句、投句二句

四月二十七日(木) 全

五月 井の頭公園吟行予定

平成二十九年二月句会報

一 今回は新人山田けいこさん（本名・啓子、名古屋在住。小生の河東節の仲間）を含め9名出席。投句10名。

啓子さんの自己紹介（地元では句会は休会中。「樂屋句会」では特選多数。清元・シャンソン・ジャズボーカル・ダンス等多趣味。娘さんは売出し中のジャズ歌手）に始まり、お土産の大口屋の麩饅頭の異称。葉の裏にルリタテハの幼虫）について一講釈。皆さんご存知の方が多いのに一驚。

堂哉さんの「通天閣クリスビーシヨコラ」、亜也さんの坂角の海老と烏賊の煎餅、弘子さんの高菜おむすび、そして小生の伊賀の純米「半蔵・神の穂」（志摩サミットに供した酒）（津の平松さんの友人から）・缶ビールを賞味し乍ら、猛さんの披露で快調に進行。御覧のように忠彦さん、一灯さん、恵洲さんが高得点でした。尚、保明さんから病休の届けがありましたこと報告。

二次会は居酒屋（個室）でたっぷり飲み気分良く引揚げました。

二 関係者近詠

夕暮れを引き寄せてゐる石路の花

孤舟

日溜りに病み鳩一羽春浅し

盛雄

一陽来復炒飯の宙返り

全

声青きサツカー少年寒の晴

全

クリスマスレコード盤の針流れ

全

果てし無き行基の影や涅槃西風（ねはんにし）

全

除夜詣きのふとけふが擦れ違ふ

全

拉致に泣く親の白髪や春寒し

健介

寒風に向かひ干さるる柔道着

全

遠足子の声に膨らむ電車かな

全

冬満月湖面の星の相寄らず

全

果樹林に寒禽さまざま姦しく

紀久男

日の欠片零してふくら雀かな

全

春寒し代演多き高座かな

全

WEP「俳句通信」VOL. 96

孤舟

寒暁や声明揺るる高野山

全

「丘の風」三田俳句丘の会2016/11月

孤舟

「きさらぎ句会」二月

春の虹色鉛筆の二十色

全

被災地の時間は止まり鳥帰る

正明

鮎跳んで刃金のひかり放ちけり

全

刃物打つ響きに揺れる紅椿

全

喜寿はまだ腕白盛り水鉄砲

全

春浅し稍吹き渡る風の音

允章

魂のまだ残りゐる蛇の衣

全

青鷺の舞ひては戻る春の水

全

一生は一幕限り蟬時雨

全

下萌や囁くやうに水の音

全

銀漢の尾に漁火のひとたむろ

全

鶉色に白鳥染むる夕日かな

熊谷國男

地球儀のくると回り小鳥来る

全

白鳥の助走激しく水を蹴る

全

裳裾より水貰ひゐる菊人形

全

濁空に鳶鳴くこゑも早春譜

全

かいつぶり潜り夕日を呼び戻す

全

渾空に鳶鳴くこゑも早春譜

全

短日や貨車ながながと橋渡る

全

渾空に鳶鳴くこゑも早春譜

全

三 孤舟さんは作品だけでなく句評・解説等で俳誌に登場されております。「俳壇」3月号グラビアに「爽樹」新年会、俳句大会並びに句集出版祝賀会での挨拶、「俳句四季」3月号に「波」主宰の山田貴世句集『喜神』より5句解説。

四 矢野誠一「ぜんぶ落語の話」白水社2016年10月刊。読売新聞夕刊に掲載していたものですが仲々面白くお勧めです。小生好みの句を抄出してみました。

柳かな風の吹くまま吹かぬまま（四代目小さん）

晩秋やひとり寝好で身の弱り（十代目馬生）

なまなかの雨に猶増す残暑哉（圓朝）

片耳は蟋蟀（こほろぎ）に貸す枕かな（七代目可楽）

母の日の袋物屋をのぞきけり（扇橋）

春の雪誰かに電話したくなり（米朝）

平成二十九年三月十六日 紀久男記